

日本IT書紀

085 日米講和

05 淹滞篇
卷之十一 地定

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

日米講和

一

前節でIBM社のパンチカード式統計会計機械装置（パンチカード・システム・PCS）が世界で大きなシェアを握るきっかけとなったのは、第二次世界大戦におけるアメリカ陸軍のMRC/MRUだった、ということを書いた。ヨーロッパでは、一九四九年五月二十三日にドイツ連邦共和国臨時政府が発足して連合国軍による占領統治が終了し、これに合わせてアメリカ軍はMRC/MRUで使っていたPCSを払い下げた。

一九四〇年七月にIBM社のトーマス・ワトソンがアメリカ連邦政府に行った申し入れでは、第三条に

「戦争に勝った暁には、枢軸国側に接収されているIBM社の資産を可及的速やかに回収し、開戦前の状況に復することを優先してほしい」

とあった。

そのときから十年近く経っている。十年以上前のPCS

となると、それを回収してもIBM社にとっては負の資産になりかねない。それなら現地で払い下げて、行政機関や民間企業が使い続けてくれれば、最低でも年間保守料とパンチカード購入費が入ってくる。新型機の潜在顧客にもなる。それがドイツ、フランス、イタリア、イギリスなどにIBM機が普及した要因となった。

日本でも同じことが起こった。すなわち占領統治の終了、日本国の独立である。

日本国の独立について語るとき、朝鮮戦争のことは避けて通れない。そのことから先に書く。

一九五〇年の六月七日、朝鮮民主主義人民共和国（以下、地域としての北朝鮮と区別するために「北朝鮮」と書く）の主席・金日成は大韓民国の大統領・李承晩に、

——北朝鮮統一のための会談を開こうではないか。

と三項目の提案を行った。

「北朝鮮」の背後にはソ連と中国共産党、南朝鮮の背後にはアメリカ合衆国がそれぞれ控えていた。米ソ対立を軸とする東西冷戦が深刻化する中で朝鮮半島はその代理的な役割を担わされた。そのため、この提案にいたるまでの間、すでに南北の緊張はかなり高まっていた。

金日成が李承晩に示した提案は、

一、六月十五・十六日に南北の平和的統一を望む政党、団体の代表による協議会を海州市または開城市のいずれかで開催すること。

二、八月五日から八日の間に、朝鮮全域で総選挙を実施し、統一的な最高立法機関を設立すること。

三、八月十五日の日本帝国主義植民地支配解放五周年記念日に、ソウルに最高立法機関会議を招集すること。

というものだった。

「北朝鮮」の初代国家主席（あるいは「金王朝」の創始者）として、自主思想を背景に、ユニークな独裁権力を築き上げた金日成という人物について、人名辞典（『日本人名辞典』『近代の外国人』三省堂）は次のように記す。

金日成

一九二二～一九九四 朝鮮の抗日独立運動の指導者。朝鮮民主主義人民共和国の政治家。中国吉林省の中学校を卒業後、抗日独立運動に参加。中国共産党に入党、東北人民革命軍に加わり、一九三八（昭和十三）抗日連合軍第二軍長となり、北朝鮮臨時人民委員会委員長、北朝鮮労働党副委員長などを経て、四八朝鮮民主主義人民共和国の成立と

ともに首相に就任。七二国家主席。

——白頭山（ペクトウサン）のふもとで生まれた。とされる。

白頭山とは、北朝鮮と中国の国境、旧満州の北緯四二度零分、東経一二八度四分にある標高二千七百七十四メートルの山であって、中国では「白長山」と呼ばれている。満州族にとって祖神が舞い降りた聖峰とされ、清朝時代には入山が禁止されていた。

日本でいう天孫降臨の地・高千穂の峰に等しい。ないし、日本にも「白山」という神社が全国にある。古代のアジア世界で、白は聖なる色であるらしい。

満州族の神話によると、祖神「朱蒙」（チュモン）はこの峰に降りた金の卵から誕生した、という。ゆえに王の一族は「金」を姓として名乗った。高句麗にも同じ神話が受け継がれ、朝鮮半島において「金」の姓は特殊な響きを持つている。

金日成が誕生したとき、

——空に鮮やかな虹がかかった。

——龍が降り立った。

といった神聖譚が語られている。

朱蒙の伝説を現代に置き換えたかのごときものではある

が、そのことはここでは問わない。そのことより、人名辞典に掲載される経歴や事績は、どうやら信憑性が薄い。

「本当の名前は金聖柱である」

という説がある。

わたしたちが知っている金日成が世界史上に登場する以前、一九四三年のこと、日本の朝鮮総督府が朝鮮の小中学生に「尊敬する人物は誰か」という調査を行ったところ、六割以上が

——それは金日成である。

と回答している。

「金日成」という名前は、朝鮮民族の英雄として広く知られていた。日本の神話でいえば日本武尊（倭武命・ヤマトケルノミコト）に似た存在といっている。

「金日成」とされた人物は四人いた。

初代は日本の陸軍士官学校を卒業した金光瑞である。

彼は一九一九年（檀紀四二五二）三月一日に起こった朝鮮独立運動「三・一事件」のとき朝鮮人若手将校を率いて満州に脱走、抗日ゲリラを組織した。中国の赤軍と連携して日本軍と戦ったが、一九二五年を境に消息が途絶えていく。

二人目は一九二二年に生まれた金成柱（キム・ソンジュ）である。

中国共産党所属の東北抗日聯合軍第六師長として勇敢に戦い、一九三七年十一月十三日に満州国軍の襲撃を受けて戦死した。彼については死体検分の記録が残っている。

三人目の「金日成」はモスクワ共産大学（東方勤労者共産大学）で軍略を学び、「白頭山の虎」の異名を取った金星で、一九四四年にソ連領内で死亡したとされる。この人物の「一星」という名も朝鮮語で「イルソン」と発音するので、伝説上の英雄に擬した偽名であるに違いない。

四人目の「金日成」が、われわれが知っている人物で、——本名は、「金聖柱」である。

という。

当初は「成柱」と表記していた。

二代目の金日成とされた人物と同じであるばかりか、それを「聖なる柱」と改造したとすれば、そもその名前自体に創作の匂いが漂う。

ともあれ、四人目の「金日成」は平壤郊外の万景台（マングヨンドン）で生まれ（ソ連領内とする説もある）、長じて金一星の下で抗日戦線に従軍した。

一九四二年から四五年春まで、ソ連第八十八特別狙撃旅団の第一大隊長にあり、四五年九月十九日、ソ連船「ブガチョフ」号で元山港に上陸した。

その四週間後、十月十四日に平壤で開かれた民族独立市

民大会で初めて「金日成」は民衆の前に姿を現した。多くの市民がイメージしていたのは八十歳に近い「白髪の老将」だった。神話の人物であれば、なるほど仙人のような杖をつき、白くて長い髭があるに違いない。

ところが、登場したのは三十三歳の青年だった。

それを見て抗日ゲリラ戦を生き抜いたつわものたちはひそかに語らいあった。

「ニセモノだ」

「ロシアの手先に過ぎない」

その声は次第に高まったが、あるときを境にソ連軍によってその声は消されてしまった。

二

一九五〇年六月に行われた北側の提案は、南側が拒否すること、そして拒否の回答が出た直後に「北朝鮮」軍が南進を開始することを前提としていた。のちに「南朝鮮」軍が「北朝鮮」軍から捕獲した文書によると、南進作戦は同年五月十七日に平壤で開かれた同国の首脳会議で決定されていた。

軍事行動は六月十一日に「起動訓練」の名目で発動しており、予想通り「南」側が三項目提案を拒否したことが口

実となった。

六月二十五日の払暁、起動訓練に動員されていた陸軍十個師団・十三万五千人はにわかに進路を南に変えた。北緯三八度の南北境界線全線にわたって、「北」の機甲部隊が「南」に侵攻した。

同時に、「北」の特殊遊撃隊である七六六部隊、海軍陸戦隊の五四九部隊などが、三八度線の南方百五十キロの東海岸に上陸した。ことに七六六部隊は「南」軍の制服を着用していたといわれる。不意打ちを食った韓国軍第八師団は後退せざるを得なかった。

三八度線をはさむ陸戦でも「南」側は圧倒され続けた。

「北」側はソ連から供給された「T34」型戦車二百五十八台を繰り出した。対して、「南」側が保有していた機甲車両は五十台ほどの「M8グレイハウンド」装甲車に過ぎなかった。五十七ミリ対戦車砲や二・三六インチ・バズーカ砲はT34の分厚い鋼板を撃ち抜くことができなかつた。

「北」の南進が始まった六月二十五日は日曜日だった。

「南」に駐留していたアメリカ軍は、二十四日土曜日から半数の兵士に休暇を与えていた。また高級将校たちは韓国軍事顧問団が主宰する徹夜パーティーに出席して、多くが酔いつぶれていた。

「北」軍が侵攻したという急報を聞いても、部隊の兵はそろわず指揮官も不在という状態だった。のちのことだが、パーテイそのものが「北」の謀略ではなかったか、という人もいる。

その真偽は定かでない。

六月二十八日、「北」の戦車部隊がついにソウルに進軍した。錐揉み作戦で突出した戦車部隊は作戦の第一段階があっけなく成功したことを喜び、ここで後続の歩兵部隊を待った。「北」軍が南進を再開したのは七月一日である。

作戦上のミスはなかったといえる。

韓国陸軍の丁一権少将は、この三日間を利用して韓国軍を立て直すことができた。といっても四散した諸部隊をソウル百五十キロ南方の大田市に終結せしめ、組織だった戦闘を行う体制を整えるにとどまった。武器がなかった。

七月七日に開かれた国連安保理事会は、六月二十五日に行われた朝鮮民主主義人民共和国に対する問責決議を受けて、朝鮮半島に国連軍を投入することを決定した。国連軍司令部は東京に置かれ、総司令官にマッカーサーが任命された。すなわち、GHQが朝鮮戦争に介入することになった。同時にそれは日本が東北アジアの戦争の基地になることでもあった。

ポツダム宣言の無条件受諾から五年を経て、アメリカ政

府の内部では日本の扱いが焦点となっていた。また一方、日本国内でも連合国との講和条約締結、独立の獲得が政治課題になりつつあった。朝鮮戦争の勃発をきっかけに、日本の独立承認が一気に具体化した。

三

順序は逆になるが、日本側の動きを見る。連合国軍による間接支配からの自立を探る動きは一九四九年に顕在化していた。表立って明確にそれを口にしたのは一九四九年十二月、東大総長・南原繁のワシントンでの講演だった。

彼は

——ソ連を含むすべての連合国と同一条件で講和すべきである。

と述べた。「全面講和」論である。このとき、政府・与党の内部には「単独講和」論が強かったため、南原の提唱は無視されてしまった。

翌一九五〇年の一月、安倍能成等平和問題懇話会が南原に同調した。

安倍能成は四六年組閣の幣原喜重郎内閣で文部大臣を務め、四七年から学習院長に就任していた。懇話会は安倍の一高時代の友人で、岩波書店社長である岩波茂雄が中心

となつて組織された進歩的知識人の集まりだつた。同懇話会が南原支持を打ち出したことは、野党に勇気を与えた。

四月になると野党の外交対策協議会が「永世中立」「全面講和」を提唱し、全面講和の声が高まった。これに對して総理大臣・吉田茂は五月三日、南原東大総長の所論を

「曲学阿世の空論である」

と一刀両断に切り捨てた。

アメリカ合衆国との単独講和という意味である。

吉田がそう判断したのには理由があつた。

もとより深刻の度を深める東西冷戦の中で、全面講和論は成立しにくい状況にあつた。アメリカ、イギリス、オランダなどが「可」といえば、ソ連、中国が「否」を唱えるであろう。どちらを選ぶかといへば、自由主義陣営、すなわちアメリカではないか、と吉田は考えた。

このとき、朝鮮半島の緊張が高まつていた。

アメリカ政府の内部では、国防総省を中心に、

「日本をアメリカ軍の基地として自由に使うために占領を継続すべきである」

とする論が日増しに高まつていた。

對して國務省は、

「講和条約を結ぶことで日本を自由主義陣営に加え、自発的に協力させたほうが得策である」

とする意見を唱えていた。

吉田の「曲学阿世」発言から一か月半後、一九五〇年六月に朝鮮戦争が勃発したわけだつた。

アメリカ合衆国政府は緊急措置として、「連合国軍」として日本に駐留していたアメリカ陸軍第八軍を朝鮮半島に急派せざるを得なかつた。四の五の言っている段階ではなくなつた。日本の占領統治に費やす予算を朝鮮の戦争に回さなければならぬ。

アメリカ合衆国大統領トルーマンという人は、

——武装した少数者や外部の圧力による征服の意図に抵抗しつつある、自由な諸国民を支援することこそアメリカ合衆国の政策でなければならぬ。

とするトルーマン・ドクトリンで知られている。しかし実態でいうと、ヨーロッパに両の目と口と頭脳を向け、片方の耳だけがわずかにアジアのために機能していた。

アジアで勃発した事態は東西冷戦の代理戦争にほかならなかつたが、彼はアジアのためにアメリカの予算を新たに投入することが厭だつた。第八軍の戦費をまかなうためには、日本の占領統治を止めてその予算を回せばいいではないか、と彼は考えた。

八月十日にはGHQポツダム政令を受けたかたちで「警察予備隊」が発足していた。やっと募集が始まつたところ

だが、旧帝国軍人が山ほどいる。日本に駐留している第八軍が抜けた穴は日本が埋めてくれるだろう。

一九五〇年九月、トルーマンは日本の占領継続を主張する国防長官マシーナルを更迭し、国務省に対し単独講和の交渉を開始するよう指令した。だけでなく、

——北朝鮮軍を押し返すには、より強力な武器、より多くの兵力が必要である。

とする総司令官・マッカーサーの訴えを、ことごとくはねつけた。

「南」軍が半島南部まで追い詰められたとき、トルーマンは「平壤に原爆を落とせ」と指示したが、マッカーサーが断固として反対した。マッカーサーは人道的観点から反対したのではなく、

——戦争というものは陸軍が攻め入って敵の本拠を占領して初めて勝利する。

という戦争哲学の表明だった。

その是非はともあれ、トルーマンの原爆投下論はこのために棚上げになり、両者の対立は抜き差しならなくなっていく。

G H Qが日本の自主独立を公言したのは一九五一年一月である。

マッカーサーが元旦の講話で、

「集団安全保障と引き換えに日本の独立を認める」

という声明を発表、同月二十五日には講和特使としてダレスが来日して吉田茂と会談した。この時点で日米単独講和は既定の事実になった。

四

五年の四月十一日、トルーマンはマッカーサーを解任した。

「老兵は死なず、ただ去るのみ」

の名せりふはこのとき生まれた。

マッカーサーの後任には、第八軍司令長官のマシュー・リッジウェイ中将が兼務で就任し、以後、日本の自主独立交渉はダレス特使、リッジウェイ G H Q 総司令官、吉田茂の三者で進められることになる。ただしこの会談の内容は秘密扱いにされ、日本の独立と引き換えに調印する安全保障条約の詳細な中身は国民に知らされなかった。

六月二十日、公職から追放されていた政財界の二千九百五十八人が解除され、八月六日には一万三千九百四人が追加解除された。同月十六日には旧軍人一万千八百八十五人の追放が解除され、政治的意味合いにおいて「戦後」に幕が引かれ始めた。

アメリカ國務省は並行してイギリス連邦諸国および、オランダ、フランスなど連合国との調整を進め、九月八日、五十二か国が参加したサンフランシスコ講和会議で連合国四十九か国が対日平和条約に調印した。

日本の全権代表は内閣総理大臣の吉田茂、アメリカ全権は國務長官デイン・アチソンだった。

——両全権がサインに使ったのは当社の万年筆でした。と、のちにシェーファー社が宣伝に使った。

条約は前文のほか二十七か条で構成され、日本の主権・平等を承認する一方、外国軍隊（つまりアメリカ軍）の日本駐留継続を認めた。また併せて朝鮮の独立、台湾、澎湖諸島、千島列島、南樺太について日本はその領有権を放棄したが、いくつかの島について帰属先が不明確のままだったために紛争の種を残した。

沖縄と小笠原諸島はアメリカを唯一の施政権者とする国際連合の信託統治下に入ることが予定され、日本が真に平和国家として国際社会で認められるようになるまではアメリカの支配下に置かれることになった。

トルーマン大統領は次のように声明を出した。

今後、われわれの間に勝者と敗者の区別を一切なくして、お互いに平和を希求する仲間同士になるために、すべての

悪意と憎しみを捨て去ろうではないか。

この演説のあと、すでに掲げられていた参加五十二か国の国旗の中に、戦後初の日の丸が掲揚された。日本が再び国際社会に迎えられる瞬間だった。

——見上げる日本全権団の目が涙にうるんだ。

と記録にある。

併せて日米両国は日米安全保障条約を締結し、ここに日本の再独立が国際的に承認された。この二つの条約は十月二十六日の衆院本会議で可決・通過し、十一月十八日に参院を通過して成立した。

これに伴いGHQは北緯二十九度から三十度の七島（薩南諸島吐噶喇（とから）列島所属の口之島、中之島、臥蛇島、小臥蛇島、諏訪之瀬島、平島、悪石島）を日本に返還した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

ドイツ連邦共和国臨時政府 東西冷戦を背景に、アメリカ、イギリス、フランスがそれぞれ統治する三つのゾーンを統合するかたちで一九四九年五月二十三日に発足した。自由民主党代表テオドル・ホイス (Theodor Heuss / 1884 ~ 1963) が大統領、キリスト教民主同盟党首コンラート・アデナウアー (Konrad Hermann Joseph Adenauer / 1876 ~ 1967) が首相、首都是ボンだった。

朝鮮民主主義人民共和国 一九四五年八月十五日に、大日本帝国がポツダム宣言を無条件受諾したあと、行政を引き継ぐために設立された朝鮮建国準備委員会が、同年九月六日「朝鮮人民共和国」の建国を宣言した。この政府はアメリカ、ソ連、中国などが承認しなかった。朝鮮半島の北緯三十八度線以北に駐留していたソ連軍を背景に、一九四六年二月、北朝鮮臨時人民委員会が発足し、九月十九日、ソ連から帰国した抗日バルチザンの金日成が初代委員長に就任した。同年八月「北朝鮮労働党」結成、四七年二月「北朝鮮人民会議」発足、四八年九月最高人民会議を経て九月八日「挑戦民主主義共和国憲法」制定、九日「朝鮮民主主義人民共和国」の樹立を宣言した。

海州 ヘジュ / Haeju : 「北朝鮮」の首都・平壤の南約百キロにある港湾都市。黄海南 (ファンヘナム) 道。

開城 ケン / Kaesong : 臨津江 (イムジンガ / Imjin-gang) が漢江 (ハンガン / Han-gang) と合流し黄海に注ぐ北岸に位置する。朝鮮初の統一国家である高麗王朝の都が置かれていた。朝鮮戦争

勃発前は「南」の領有するところだった。

朱蒙 前58 ~ 前19 (伝説上の生没年)。東明王。『三国史記』高句麗本紀・東明聖王紀によると姓は高、諱は朱蒙または鄒牟 (チユモ)、衆解 (チユンヘ) とされる。高句麗『広開土王碑文』に「鄒牟王」、日本書紀「葛城大王 (天智天皇 紀) に「仲牟王」の名で登場する。

自主思想 自主 (チュチュエ) を全面に掲げた国家思想。①思想における主体②誠意における自主③経済における自主④国防における自衛などが骨子で、金日成政権でナンバー3とされた黄長燁 (ファン・ジャンヨプ / Hwang Jang-yeop)、元朝鮮労働党書記、1923 ~ 2010。一九九七年韓国に亡命) が体系化したといわれる。

檀紀 檀君紀元。朝鮮神話の最初の王・檀君王儉が即位したとされる西暦紀元前三三三年を元年とする。ただし朝鮮半島最古の史書である『三国史記』(金武斌編著) には檀君という王は登場していない。

金光瑞 キム・ゲアンソ / 1888 ~ 1942。明治四十二年五月作成の陸軍中央幼年学校本科第八期卒業生徒人名表、同四十五年五月作成の陸軍士官学校第二十三期生徒卒業人名表によると、本名は金顕忠 (キム・ヒョンチュン)。日韓併合に際して届け出た名は「金光瑞」、抗日独立運動で「金撃天」(キム・ギョンチョン) を名乗った。当人が「金日成」を名乗ったことはない。

金日成のソ連時代 このことは「北朝鮮」では一切触れられていない。息子である金正日はソ連で生まれたが、彼もまた白頭山の麓で生まれたことになっている。

「北」の特殊遊撃隊 南進の初戦に限らず、北朝鮮軍は海浜から

韓国内に潜入し後方攪乱や破壊活動を行った。同じ朝鮮語を話すため、面相や服装では北朝鮮工作員かどうか識別できないことから、韓国は国民番号・国民カード制度をスタートさせ、国民に常時携行を義務付けた。

**T 34 型戦車** 第二次大戦中、ソ連軍の対ナチス・ドイツ戦線で最も活躍した。平均五十ミリの装甲を備え、最高速度は五十一キロ／時、連続行動距離は四百六十五キロ、最大斜度三十五度の登坂能力、平均八百メートルの砲撃力でナチスドイツ機甲師団を打ち破った。

**丁一権 Jeong Ilgyon** / チョン・イルグオン / てい・いつけん / 1917~1994。大日本帝国支配期に入植していた沿海州ウスリースクで生まれた。日本の陸軍士官学校を出て満州国憲兵隊上尉となった。一九四五年八月韓国軍少将、五〇年六月三十日陸軍参謀総長に昇格し大将。一九六四~七〇年韓国首相を務めた。  
**南原 繁 なんばら・しげる** / 1889~1974。香川県に生まれ一九一四年東京帝国大学を出て内務省に入った。二五年東京帝大教授、四五年三月法学部長、のち総長となった。貴族院議員を兼ね、退官後、日本学士院院長として会館再建中に死去。

**安倍能成 あべ・よししげ** / 1883~1966。愛媛県に生まれ一九〇九年東京帝国大学を出てヨーロッパ留学後、京城大学教授、四〇年一高校長、四六年幣原喜重郎内閣で文相、四七年学習院院長。

**岩波茂雄 いわなみ・しげお** / 1881~1946。長野県に生まれ一九〇一年一高を退学、〇五年東京帝国大学に入った。〇九年神田高等女学校教諭となり教頭までなったが一三年神田神保町に古書店を開業、一五年に独自に出版した『哲学双書』で出版社

の地位を不動にし、一六年『漱石全集』、二七年「岩波文庫」の刊行を開始した。四五年貴族院東京補欠選挙で当選し、四六年文化勲章を受けた直後、脳溢血で死去した。

**トルーマン Harry Truman** / 1884~1972。ミズーリ州に生まれ民主党上院議員を経て四四年副大統領。四五年ルーズベルト大統領の急死により第三十三代大統領となり、四八年再選を果たした。第二次大戦後のヨーロッパ復興と朝鮮戦争を指揮し、北大西洋条約機構(NATO)の結成や日米安全保障条約締結など東西冷戦の構図を固めた。

**トルーマン・ドクトリン** 一九四七年、共産圏からの圧力を受けていたギリシアやトルコに対して四億ドルの経済援助を実施するよう議会に要請した演説。

**警察予備隊** 一九五〇年六月二十五日に朝鮮戦争が勃発、七月八日にマッカーサーから吉田茂に「日本警察力の増強に関する書簡」が提示された。共産勢力による社会攪乱や暴力集団による暴動を制圧する反乱鎮圧部隊として、七万五千人の「警察軍」が想定されていた。一九五二年(昭和二十七年)十月十五日「保安隊」に改組・改称し、のち陸上自衛隊の母体となった。

**平壤への原爆投下計画** トルーマンは広島、長崎への原爆投下が第二次大戦終結の決め手になったと信じていた。そこで彼は、「北朝鮮」の平壤に原爆を落とせば朝鮮戦争は終わると考えた。しかしマッカーサーは陸戦に勝って力で押し返さない限り「北朝鮮」ないしソ連、中国の南進の野望を絶つことはできないと主張した。  
**ダレス John Edgar Dulles** / 1888~1959。プリンストン大学を出てトルーマン政権の顧問となり対日講和問題に取り組んだ。五三年アイゼンハワーの国務長官として対ソ冷戦戦略を推進

し東西緊張を高めたばかりでなく、アジア、中東地域での民族自立を抑圧するなど第二次大戦後の国際関係に禍根を残した。

メートル。

マシュー・リッジウェイ Matthew Bunker Ridgway / 1895  
 ~1993。バージニア州フォート・モンローで生まれ一九一七年ウエスト・ポイント陸軍士官学校卒。第一次大戦時は士官学校教官を務めていた。中国、ニカラグア、フィリピンに駐在し日米開戦時は作戦計画本部、のち第八十二師団長となり四四年ノルマンディ上陸作戦でコタンタン半島にパラシュートで降下した。次いで陸軍第八軍司令官として日本に進駐した。マッカーサーの後を受けて連合国軍最高司令官となったあとと大將に進み五二年在欧連合国軍司令官、五三年陸軍参謀総長となり、五五年退役した。帰属先不明となった島 千島列島の齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島(帰属交渉相手はロシア)、日本海の竹島(韓国)、東シナ海の尖閣列島(中国)だった。

日の丸掲揚 一九四五年十二月二十九日、GHQは正月の一日、三日、五日に国民が日の丸を掲揚することを認め、翌年四月二十二日、天皇誕生日(四月二十九日)および国民の祝日に日の丸掲揚を許可した(連合国軍最高司令官総司令部指令SCAPIN-1774-A)。しかし国際的には独立国とみなされていなかったため講和条約締結のときが初の掲揚になる。

返還された島 ①口之島・くちのしま / 十三・二五平方キロメートル ②中之島・なかのしま / 三十四・四七平方キロメートル ③臥蛇島・がじゃじま / 四・〇七平方キロメートル ④小臥蛇島・こがじゃじま / 〇・五平方キロメートル ⑤諏訪之瀬島・すわのせじま / 二七・六六平方キロメートル ⑥平島・たいらじま / 二・〇八平方キロメートル ⑦悪石島・あくせきじま / 七・四九平方キロ

# 日本IT書紀 085 日米講和

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。